

博士（人間科学）学位論文 概要書

社会不安の情報処理過程における  
post-event processing の役割

The role of post-event processing in the information  
processing of social anxiety

2009年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

五十嵐友里

Igarashi, Yuri

研究指導教員：嶋田洋徳 教授

本研究の目的は、社会不安の情報処理過程における **post-event processing (PEP)** の役割を検討することであった。

第1章においては、社会不安障害における **PEP** に関する研究が展望された。第2章においては、関連する先行研究を展望した結果、以下の4点が問題点として指摘された。それらは、①わが国において、**PEP** を適切に測定することのできる尺度が整備されていない、②**PEP** と心配、反すうの異同や関連について明らかにされていない、③**PEP** がどのようなメカニズムで社会不安の維持に影響を与えているのかが不明確である、④**PEP** に介入して、社会不安症状を低減させた研究がほとんど見当たらない、であった。そして、これらの問題点を明らかにすることの研究的意義、および心理臨床的な意義が述べられた。

第3章においては、②の問題点の一部を解決するために、**Cognitive Intrusion Questionnaire** 改定版を用いて、**PEP** と反すう、心配の思考様式の異同について検討した。その結果、**PEP**、反すう、心配の順で過去指向的であること、**PEP** は反すう、心配と比較してイメージで経験されやすく、さらに、そのイメージは観察者視点のイメージとして浮かぶ傾向が高いことが示された。

第4章においては、まず①の問題点を解決するために、**PEP** を測定する **post-event processing Questionnaire** 日本語版 (**PEPQ**) が開発され、信頼性と妥当性が確認された(第1節)。さらに、第2節以降では、③の問題点を解決するために、社会的場面を経験しているときの社会不安に特徴的な情報処理バイアスと **PEP** の関連に焦点を当てた。第2節では、**PEP** が活性化することが社会的状況に対する解釈に影響を与えるかどうかを検討した。その結果、解釈は **PEP** の活性化を受けてネガティブに歪められる可能性が示され、また、その過程には観察者視点の自己注目が関連していることが考えられた。そして、第3節では、ネガティブな解釈は社会的状況を経験しているときの状態不安を高め、さらに、後続する類似の社会的場面に対する予期不安を高める影響力を持つ可能性があることが示された。最後に第4章においては、社会不安障害患者に対してインタビューを行った。その結果、**PEP** の活性化が状態不安を高め、予期不安を高めることにつながることを示唆された。したがって、**PEP** は社会不安の介入対象となりうる要因として位置づけられることが明らかになった。

第5章においては、②の PEP と反すう、心配の関連についての問題点と③の問題点を解決するために、共分散構造分析によってこの3つの認知的処理がどのようなメカニズムで社会不安症状の維持に影響を与えるのかが検討された。特に、③の問題点の解決においては、社会的場面経験時に焦点を当てた第4章に対し、第5章では社会的場面経験の事後の認知的処理に焦点を当てて検討を行った。その結果、PEP は反すうや心配の活性化の始まり、すなわちリスクとして機能し、社会不安症状に影響を与えることが明らかにされた。特に、「PEP→反すう→心配→社会不安症状」という処理の流れの影響が強いことが示された。ここでも、PEP を社会不安に対する介入の対象として扱う意義が見出された。

第6章においては、第3章から第5章までの知見を総合し、かつ④の問題点をふまえて、PEP の介入における効果検討を行った。第4章より、PEP はネガティブな解釈や不安の維持に機能している可能性が示され、第5章より PEP は反すうと心配の発端となり、社会不安症状に影響を与えることが示唆された。これらの研究によって PEP が社会不安症状の維持においてネガティブな機能を持っていることが明らかにされ、PEP に介入する意義が示唆された。また、第3章より PEP は観察者視点の自己イメージで経験されやすいことが示されたことから、現実的な自己イメージの呈示を用いて PEP の活性化を低減させるための介入を行い、効果検討を行った。PEP に対する介入としてビデオフィードバックと認知的対処のトレーニングを行う群、認知的対処のトレーニングのみを行う群、統制群（日記を書く）群を設け、実験内で行うスピーチ課題に対する PEP と社会不安に対する介入効果を検討した。その結果、ビデオフィードバックと認知的対処のトレーニングを行った群においてのみ、PEP と社会不安の低減が認められ、ビデオフィードバックによって現実的な自己イメージを知覚することが PEP の活性化の低減に有効であり、さらには社会不安の低減にもつながる可能性が示された。

最後に第7章において、本研究の結果に対する総括的な考察が論じられた。その概要は、①本研究のまとめ、②本研究の臨床に対する示唆、③本研究の限界および今後の課題であった。